



気になるあいつ
わかぎるふ

双葉社

とあるイス

近所にイスがある。家の前を20mくらい南に行つた所にある公園の入り口に置いてあるのである。ただのイスではない、写真を見ていただいたら分ると思うが、車のシートだ。しかも前の座席である…。

ものすつごく気になる。この車のイスはいったい誰が何の目的で外したのか？ なんてうちの近所の公園の前に置いていかれたのか？ 事件か？ 事故か？ この車の持ち主は前部の座席がないまま運転したのだろうか？ なんてことが一瞬のうちに頭の中を駆け巡つた。

都会の中には時々気になるイスが置いてある。家の中で要らなくなつ

たのだらうなと想像させられるイスたちは、バスの停留所などに放置されている。きつと捨てるのも忍びないので、せめてバスを待つてる人に乗ってもらえばと置いていかれるのだらう。

いやいや、そんな親切な考え方ではいけないのだらうか。捨てるには粗大ゴミの申請なんかをしなきゃいけないので、邪魔臭くて捨てていくのだらうか。ともかく都会の中には「なんでここにイスがあるわけ？」という場所に時々置いてある。

東京に住んでいた頃、中野に「クラッシュック」という喫茶店があった。そこは文字どおりクラッシュックを聴いてくつろぐ喫茶店なのだが、家具がすべて拾ってきたもので賄われていた。テーブルは古いミシンだったり、大昔に流行ったであろうゲーム機だったり。イスは小学校の頃に先生が座っていたような木の肘掛があるべっちゃん貼りのものや、豪華なソファだったり、逆に硬い丸イスだったりもする。喫茶店にはルールがあ

って飲み物だけはそこで注文する事。あとはお弁当やお菓子、食べ物を持ち込んでも可というまことに学生の味方のような喫茶店だった。

たぶん、かけているレコードも店長が拾ってきたり、蚤の市で安く買って来たものだったようで、時々針が飛んで曲が途切れていた。これまた拾ってきたらしき黒板にリクエストを書いておくと何時間もしてからかけてくれる事もあるという、ゆったりと時間を楽しむような場所だった。

当時、お金もなかったし、その場所の雰囲気が好きで私はちよくちよく行ったものだった。お気に入りのレコードとイスがあつて、その曲がかかって、そのイスに座った日はちよつぱり幸せな気分浸れたものだ。なんでもないシンプルなデザインのイスだったが、真っ黒の革張りで「昔の人は家でこんな色のイスを使っていたのだろうか?」「いや、これはやくぎの食卓で使用されていたものかも……?」「待てよ、黒いってことは劇場のイスか?」などと想像を巡らして楽しんだ。思えば暇な二十代

の前半であった。

今は格好重視の時代。古きよきボロ屋の喫茶店が存在しているかどうかは定かではないが、ああいう喫茶店の片隅に、まだ座れるのに捨てられたイスたちが存在していた事は確かだ。

さてさて、我が家の近所のあの車のシート…いったい誰が置いて行ったのか？ 公園の入り口なので、あのイスがお気に入りになる子供がいるかもしれない。いや、野良猫のお昼寝イスになるだろうか…用途の決まったものが捨てられていると、私は想像力を押さえる事ができなくなっていく。そして…こっそりあのシートに座りたいと熱望している。

【著者略歴】

わかぎあふ

1959年、大阪府生まれ。女優、エッセイスト。1986年より作家・中島らも氏とともに劇団「リリパット・アーミー」を主宰し、現在同劇団の進化形「リリパット・アーミーⅡ」の座長。1994年より演劇ユニット「ラックシステム」を旗揚げ。演劇制作会社「玉造小劇店」を運営し、女優のみならず、脚本、演出、メイクから衣装まで芝居全般にわたりその才能を発揮し続けるスーパーレディ。主な著書に『すみっこのすみっこ』『女体の神秘』『秘密の花園』『ぬくい女』『太りすぎの雲』『イブの抜け穴』など多数。
